



Title	「憑依」(Possession)の報道：キリスト教国フィリピンの教会の視点から
Author(s)	宮脇, 聡史
Citation	言語文化研究. 2019, 45, p. 191-210
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/71639
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「憑依」(Possession) の報道

—キリスト教国フィリピンの教会の視点から—

宮 脇 聡 史

Reportage of “Possession” in the Philippines

MIYAWAKI Satoshi

We notice so many articles on so-called “possessions” in the Philippine newspapers, where there are descriptions on how mainly high school students experience seeming mass hysteria. This thesis first suggest that this phenomenon is far from being dealt with in the Philippine studies by related sciences like anthropology, sociology, psychology or mental science. Then it clarifies what this may suggest about social place of the Catholic Church as well as paradoxical function of the church, by comparing newspaper articles with church official documents and news. It also describes how people expect much from the church in a very conventional way, especially in the context of already established church-state separation and organizational secularization, when something spiritual and difficult to solve like “possession” occurs, as well as how the church is a passive respondent of this expectation, implementing what the people expect without clear discourse, that is, routine of traditional rituals of cleansing. It also analyses socio-religious implications of this structure.

キーワード：憑依、報道、悪魔祓い

はじめに

フィリピンにおいては、20世紀前半のアメリカの植民地政策によって、それ以前の植民地支配下でのカトリック教会による政治、経済、社会への関与が法的、制度的に排除された。その結果、東南アジアのほかの国々と比べて、政治や経済の体制や制度と教会の組織、運営が分離された状態が長年にわたって確立してきた。しかし、他方でそれでもカトリック教会は、紆余曲折を経ながら、特に政治において強い影響力を保持してきたとみられている。なぜ、どのような背景でそうなったか、というのが筆者の長年の関心であり、特に教会側の生み出してきた言説、及び並行する政治状況の変遷と教会の政治関与の実際に着目しながら研究してきた。

筆者は特に、教会が「フィリピンはアジア唯一のキリスト教国」とし、自らはその指導者だ、

と自負してきたこと、そしてそうした考え方がかなりの程度何らかの形で広く受け入れられてきたことが、引き続き政治関与を成り立たせる土台にあることに着目し、そのことを、主に教会の公文書、マスメディアの報道、教会をめぐる様々な宗教実践に関する諸研究を相互に照らし合わせることで明らかにしてきた（宮脇 2006、宮脇 2010）。

本稿の「憑依 Possession」に関する報道は、そうした研究の文脈の中で、日々宗教と社会の関係についてのニュースをできるだけ幅広くチェックするよう努める中で筆者が気づいた付随的な問題の一つである。とはいっても以下に述べる通り、この問題をめぐって、教会と社会と政治の隙間にあって十分に取り上げられてこなかった無視できない宗教的なテーマが見えてくると考える。本論考では、過去10年以上に及ぶ新聞等のメディアによる「憑依」報道の具体的な特徴を示し、過去の諸研究と関連付けたうえで、特に教会の動きを中心に分析し、それをカトリック教会が築き上げてきた政治社会的な地位や諸施策、フィリピン人の宗教性についての解釈と結び付けてとらえ直すことで、「憑依」のもつとらえ難さを通じて見えるフィリピンの宗教社会の一端を明らかにしたい。

1. 新聞記事に見られる“Possession”

フィリピン地域研究における Possession をめぐる研究傾向については後述するが、その対象は大まかに言って、儀礼の文脈で宗教者が目指す憑依と、逆に病気あるいは治癒対象としての憑依である。フィリピンにおける霊的な憑依についての学問的な考察は、特にキリスト教化が進んでいない地域の霊媒師による儀礼の中での憑依や、キリスト教世界の民間信心における霊媒の憑依儀礼についてのものがよく知られている。他方、後者に関しては、呪医による治癒行為の研究と、精神科医による医学的な解釈、及び両者の橋渡しがみられる。いずれも憑依された患者個人の罹患原因と治癒に関する研究である。そのため、これらの研究は神学や精神医学、心理学の中で行われており、人文社会科学の中ではあまり認知されていない。

ところが、報道において「憑依」が記される場合、そうした議論とは少々様相が異なる。特にキリスト教社会のハイスクールで起こる集団パニック状態に関するものが多い。しかもこれは地域を揺るがす事件として報じられ、とりあえずの解決を見たかどうか、また同様の出来事が繰り返されるかもしれない、というやや未解決な不穏な出来事として語られてきた。それが故に、これらの出来事は社会学、人類学、宗教学的な検討に値するはずだが、実際にはフィリピン・キリスト教社会における「憑依」については医学・心理学系統の個人の症例研究的なものを超える研究は管見の限りほとんど見当たらず、まして集団によるケースについて分析した研究は皆無に等しい。この論考はフィリピンの最近20年ほどの新聞記事において Possession として記述されてきた現象、及びそれに関連した様々の解釈を対象とするものであり、この論考における「憑依」の語は、フィリピンの新聞記事やフィリピンの教会、学問において Possession

として記述されてきた現象を、そのあいまいさやぶれを意識しつつ指している。

以下まず新聞記事の内容を紹介し、その特徴の把握を踏まえて、社会的な意味の一側面を明らかにしていきたい。

2. 記事における“Possession”の語られ方

Possessionに関する記事のうち、宗教儀礼における霊媒師の憑依の紹介や、教会等における関心の喚起についての記事を除く、集団的な「憑依」のケースの記事は、2000年以降の主要紙のウェブサイトから宗教に関する記事の収集を重ねてきた発表者のもとには、21件あった（主な記事の内容については末尾に「資料」としてまとめて掲載する）。

(1) 症状については、激しい震えや気絶、豹変し叫び異常に力が強くなる、黒い人影を見ておびえる、「出て行ってくれ」あるいは「連れて行かないで」などと訴える、といったものがみられる。

(2) 地域については、セブ、もう少し広げてビサヤ諸島での出来事についての記事が多い。

(3) 対象をみると、ハイスクールの学生がほとんどである。女子学生が多いともいえるのかもしれないが、断言するにはデータが十分とは言えない。

(4) 原因をめぐるのは、木を切ることをめぐる問題が絡んでいるケースがいくつか見られる。また、殺害された遺体の墓地や投棄された場所ゆえと言われるケースも散見する。関係者による原因の説明としては、心理学的な説明と宗教的な説明が併存することが多い。また教員、心理学者、聖職者の間にも考えの違いがみられる。

教師たちが原因を、親子関係などを背景とした心理的な問題、それが青年たちの間に広がる集団ヒステリーとの解釈、さらには場合によっては事件に乗じた青少年のいたずらと考えているケースも散見される。聖職者たちは事件を悪霊の憑依とみるのにやや慎重な傾向だが、それでもカウンセリングだけでなく一連の儀礼をおこなうのが通例である。教会のエクソシスト（悪魔祓いの専門家）が登場する場合は、人々の悪故に悪霊が憑りついたのだ、と主張している。逆に司祭の中には自分は専門家ではないので詳しいことはわからない、という者もいる。

同じような出来事が何度もあった、というケースが散見される。またすぐに簡単に解決せず、数日ないし1週間ほど経過して落ち着くようなケースも少なくない。

(5) 解決法については、教会（特に小教区の教会）の司祭による祈祷、ミサ、告解、祝福などの儀礼がほとんどの場合に実施される。特に重い症状の人の場合には悪魔祓いが行われたと言及される記事がいくつかあった。行政の最小単位である「バランガイ」(Barangay)の関係者も学校側からの相談を受けると、教会関係者に相談している。

呪医が出てきたケースが1件、霊能治療者（記事にはどういう人たちか具体的な言及がない）

が出てきたケースが1件あった（未解決のまま記事が終わる）。医者が来るケースも数件ある。

学校によっては、教師が問題を同年代の仲間たちに伝播しやすい心理的なものととらえ、症状を起こした者をほかの学生から離すことで拡大を防げる、という理解に基づいて行動していた。それ以外にも、学校や教師が事態の悪化を防ぎ、休校してニュースになるような事態になっていなかった場合もあったといわれている。それでも事態が悪化すると、たとえそれをなお悪霊云々ではなく、あくまでヒステリーが原因と考えていた場合でも、教会に対応を求めたとの記述がある。

(6) 結果については、授業が中止になるという記述が多い。但し、授業が中止になるほどになって初めて報道される、とも推察されるので、そう考えれば、大事に至らなかったケースはずっと多いことも推測させる。数日で授業が再開する場合にも、「解決」（説明はないが、再発が防止されたと関係者によって判断される状況を指すと考えるのが自然であろう）するまで親が学校に子どもを行かせないというケースもある。

事態が収まってきたところで、学内でのミサと校舎全体の（聖水と祈りを伴う）祝福をもって区切りをつけることが多い。

以上のように整理し、当該研究テーマがこれまであまり深められてこなかったことをも考えに入れる時、かなり多様な研究テーマを引き出すことができそうである。特に女子学生への傾斜、憑依された人々が共通に述べる黒い人影の文化的な意味、木の伐採とそれに伴う不安をめぐる文化的な問題など、特に人類学的な調査によって解明が望まれる諸現象が報じられてきていることがわかる。しかもセブ周辺の事例にやや傾斜しており、文化的背景をどの地理的、民族的範囲のものとして理解するかという基本的な問題も絡んでくるだろう。しかし、これらは大変興味深く重要な点ではあるが、筆者にはこれらを十分に検討する準備がない。これらの問題については今後の地域研究、人類学的調査に期待することとし、ここでは、キリスト教国フィリピンの教会をめぐる「憑依」現象の問題に限定して述べる。

3. フィリピン・カトリック教会にとっての宗教文化の位置づけ

では、カトリック教会は、このような、主に学校を舞台とした集団的な「憑依」をどう受け止めているのだろうか。この点を明らかにする前に、その前提として、教会がフィリピンに広範にみられる民間の信心全般をどのように理解しようとしてきたのかを簡単に振り返る。

1960年代に第2バチカン公会議を経てカトリック教会の「現代化」が世界的に高唱され始めた頃、フィリピンでは、スペインの植民地統治と共にもたらされたカトリック信仰についての教会の評価が大きく変わりつつあった。人類学者リンチによる「フォーク・カトリシズム論」

は、従来の「フィリピンは十分カトリック化されており、重大な逸脱はない」とする立場と衝突しながら、フィリピン社会には教会の公式教理と相いれない独自の霊的な考えが大いに入っているとする理解を提示し、これが次第に受け入れられるようになった。つまり、フィリピンはカトリックが大多数のキリスト教国であるが、同時に庶民の宗教理解は「成熟」していない、それを乗り越えなくてはいけない、という考えが強調されるようになる (Lynch 1975, 宮脇 2006)。これは、庶民の宗教性を重んじる「解放の神学」などと衝突しながらも (Kinne 1990)、後述する通り、1990年代には教会会議、要理書、司牧教書などにおいて体系化されていった。

カトリック司教協議会の公文書において、こうした教会とは異なる庶民の宗教観は、庶民の宗教の素朴さと未熟さとして批判されることもありつつ、同時に教会の司牧監督のために知っておくべきこととされた (CBCP 1999)。また庶民の宗教観、世界観については、後述の通り専門家の間ではこれを精神医学の文脈で捉えようとする議論も、1960年代以降、ブラタオ (Jaime Bulatao) やメルカド (Leonardo Mercado) によって盛んに行われてきた。

4. カトリック教会における「憑依」の位置づけに関するいくつかの議論

では、そのような全般的な関心のもと、「憑依」について教会はどのような理解を示しているのだろうか。こう問いながら調査を進めて見えてくるのは、少なくとも文書レベルにおけるカトリック教会の指導層のこの問題への徹底した無関心である。

現代の教会のあり方をボトムアップの視点を積極的に取り込んで再検討した1991年の第2フィリピン教会会議文書にも、それを踏まえて信徒教育の拡充を目指して1997年に発行された『フィリピン人カトリックのための要理書』にも、フィリピンの宗教性を振り返り、教会の使命を確認した1999年の「フィリピン人の霊性に関する司牧書簡」にも、この「憑依」問題に関する言及がまったく欠けている。カトリック司教協議会の司牧教書類全般にも、さらにはカトリック司教協議会のニュースレターである CBCP Monitor にも、全くの言及がない。

新聞記事をチェックすることで、やっとある程度教会の動きが見えてくる。2009年11月7日の新聞記事には、レイテ・サマルの司祭たちが悪魔祓いについて学んでいるとある。それ以降数年にわたって、時折教会が「憑依」や「悪魔祓い」の問題に取り組んでいるという記述を散見する。特に2011年6月3日の「教会は徐々に「悪による憑依」のケースに踏み込みつつある」と題された記事や、2013年11月2日の「司教協議会当局：「憑依された」10代の青少年のケースが増大している」と題された記事は、教会当局の中でこの問題に対する関心が一定程度高まっていることを示しているし、ある程度のイベントが行われていることも分かる。またマニラ大司教区やセブ大司教区には、近年悪魔祓いの公式の担当部局や組織が設けられ、長が立てられている。こうした動きも最近10年の中でのことである。

さらに教会関連の著作や論考を見ると、以下の3名に代表される潮流が確認される。

(1) ブラタオ

フィリピンにおける社会心理学及び「憑依」に関する研究の古典的な権威である。「憑依」は基本的に「意識の変性状態 (altered state of consciousness)」であり、伝統的な治療とその効果も、これに基づいて十分説明できる、とする。現地文化の象徴を活用した応用催眠術とでもいうべきもので対応できるのではないかとする (Bulatao 1982, Mercado 1988)。近年ではGINGRICH (Heather Gingrich) がこれを踏まえつつ、重大な心的外傷に起因する症状として理解する可能性について臨床に基づいて多角的に検討している (Gingrich 2006a, Gingrich 2006b, Gingrich 2009)。

(2) シキア (Jose Syquia)

マニラ大司教区公式悪魔祓い士長。ブラタオと対照的に、精神医学で解明できるケースは多いものの、悪霊の憑依もあり、見分けた上で悪魔祓いが不可欠とする (Syquia 2013)。本研究で扱っている新聞記事に数回現れているセブ大司教区の公式悪魔祓い士長であるクリーケンベーク (Frederick Kriekenbeek) 師もおおよそこの考えである (巻末資料を参照)。

(3) スバトゥ (Alfons Sebatu)

インドネシア出身の司祭で精神医学の専門家であり、インドネシアとフィリピンの両方で臨床及び悪魔祓いの経験を持つ。ブラタオ同様、フィリピンの「憑依」のほとんどは精神医学的な説明が可能としており、それを知らない人が多すぎるため適切な対応ができず、伝統的な呪医による間違った対処も間違った恐れや被害を増幅しているとする。但し、まれに悪霊の憑依もあり、この場合はカトリック的な悪魔祓いの儀礼が必要とする (Sebatu 2009)。

以上に基づき、教会のこの問題に対する基本的な姿勢を、次のように整理できる。

(1) 「悪魔祓い」について教会の一応の統一的な見解はあるものの幅があり、状況判断が必要かつあいまいである。その結果、司牧の現場で問題となる、主に学校を現場とする青少年の「憑依」については、状況性に富んだローカルな現場、しかも普段は教会人の関与が限られている学校のような場で「憑依」とされてきたものと教会の「悪魔祓い」との関係性を明確にするのは難しい。しかも「憑依」である、となったところで医学、宗教、伝統的な呪医をどう関わらせるかに関して諸説あって立場が定めにくい。

(2) 他方で、集団ヒステリーとも描かれるような状況の現場においては、とにかく緊急に、即断即決で対応を迫られる。さらに人々の教会に対する慣習的な宗教的期待 (超常的なことについては教会が儀礼をすれば何とかなる、という期待というべきか)、そして具体的な効果が表れることへの要求がある。これに適切に対応しようとして、教会は伝統的な儀礼に基づいて、特に祈りとミサと祝福と悪魔祓いによって対処してきている。

(3) 教理的に比較的に明瞭な悪魔祓いの部分については、バチカンの関心の高まりと合わせて徐々にエクソシスト (悪魔祓い士) の制度が整備されつつある。教会の通例の対応では限界

がある、という場合には「悪魔祓いの専門家に頼む」という選択肢が新たに登場してきている。

5. 「憑依」をめぐる社会的な構図

それではこのような、引き続く学校の「憑依」、それを報じる記事、そして教会の間にはどのような関係構造があるのだろうか。そこから教会の社会に対する対し方や社会における教会の位置はどのように理解されるだろうか。やや仮説的ではあるが、著者自身の過去の研究の中から浮かび上がってきた教会と社会の関係に関する議論に照らして、主に三つの点を指摘する。

一つは「憑依」の意味の自明性に関する問題である。新聞記事において「憑依」は大抵学校で集団的に起こり、そこにいた学生たちが次々と心ここにあらずの状態になり、通常の活動を行えなくなるとあるが、それ以上の具体的な描写をほとんど伴わない。本当にこれは「憑依」と呼ぶべきものなのか、そして本当のところ起こっていることは何であるのか、についての書き手の懐疑がにおわされつつも（特に possession が引用符付きで書かれる記事が少ないことから明らかであろう）、結局「憑依」以外の何物として説明し直されることもなく、さらには多くの記事では当該地域でそのように幅広く信じられているように描かれている。いわゆる「集団ヒステリー」(mass hysteria) のようなものと考えられやすい面も多分にあるにもかかわらず、医者役割も限定的に見える。多くの場合、学校も行政も当たり前のように教会指導者の支援を求め、結局神父による諸儀礼によって収まった、とされることが多い。現場の多くが公立学校であるにもかかわらず、教員や行政が大きな役割を果たせていないことについて、記事においては特に問題とされないが、あたかも宗教家に任せるのが当然視されているかのようである。その結果、行政のひとつの要である教育の現場で、国家が踏み込めない領域に、ふだんは一応の政教分離のもと、世俗教育の中でやや蚊帳の外にあるはずの教会指導者が、ここでは当然のように極めて特権的な役割を期待されている状況が描かれている。しかもこの当該の教会自身は、この現象が本当の憑依かどうか結論を出せないまま、いわばこのような「憑依」をめぐる理解枠組によって動く社会に引き込まれたまま、割り当てられた役割を演じている。これは教会が社会において果たしてきた役割の一つの縮図であると言えるかもしれない（川田 2003）。

二つ目は教会の対応に関する問題である。一方では公式の制度として悪魔祓いを担う組織や担当者が整備されてきている。悪魔祓いの当事者によればその数は少なく、フィリピン全土の需要には応えきれないと言うが、それは「憑依」現象の背後に悪魔の働きを見、人々の悔い改めが切実な問題と考える思想的な立場からの評価である。しかしもしこの「憑依」から倫理性や思想性をいったん取り去って、単純に学校で時々起る集団ヒステリーに類する現象と理解し、これを社会的な逸脱と考えて、正常化によって解決すべき問題と捉えれば、実はエクソシスト抜きの慣習的な方法でほとんどのケースが解決しており、実はエクソシストの数はさほど要らないように見える。まただからこそセブ近辺の問題について難しいケースでもたった一人の司

祭のもとに持って来られて解決している、ということもできるかもしれない。教会の公文書において全く取り上げられないなど、教会が実際的には「憑依」をさほど重要と考えている様子が見えないことと重ねて考えると、教会は一方でこれまでのやり方でなく、新たに悪魔祓いの制度を整備しなくてはならない、と言いながら、実際にはこれまで通り、世間が教会に期待している役割に沿った、これまで通りの実践を続けている。世間が悪魔祓いの制度の整備に期待していないのと同様、教会も結局、それを必要としているような動きをしていない。

これは教会の司牧上の他の問題、例えば要理教育の未整備問題などと構造的には似ている。要理教育の場合は、人口の8割を占めるはずのカトリック教徒の要理教育のためには司祭や信徒指導者などの人材が圧倒的に足りない、だから信徒であるはずの親たちがしっかり子どもたちに要理教育をしなさい、と教会は長年主張してきたが、具体的にみれば、要理教育の教材も、体制も、プログラムも、要理教育が実際には一握りの人によって、一握りの人たちのために行われるのに合うようにしか作られていない。つまり、要理教育を多くの人に提供する緊急の必要があると言いつつ、実際にはどうせ庶民の親たちは子どもたちに宗教教育をきちんとやるはずがないから、要理教育はこれまで通り少数の人向けの体制でよく、あとは人々が期待する通り、典礼、特に通過儀礼を提供しておけば大体十分、という仕組みで動いている（宮脇 2006）。

三つ目は「フィリピンにおけるキリスト教」をめぐる教会の解釈と、その中における「憑依」の位置づけである。1960年代以降の教会近代化の中で、フィリピン社会の民間信心は要理書や司牧教書等において繰り返し成熟を要する宗教性、単純化して言えば迷信として扱われてきた。しかし、そのような「未熟な宗教性」の現れのひとつとして、「憑依」が扱われることはほとんどなかった。その要因として、学校、特に公立の学校がカトリック教会にとって持つ意味と結びついてくるであろうことが容易に想像される。歴史的に言えば、カトリック教会にとって公立の学校はアメリカ統治の開始とともに持ち込まれた、忌むべき世俗教育の牙城であったのであり、カトリック教会は長年、この呪われた近代教育を贖うために、公立学校のカリキュラムに宗教教育を導入することを目指し、1世紀近くにわたる長い戦いの末、遂に1987年の憲法においてその目標を達成した（市川 1999）。1960年代以降の教会現代化の中で、公教育自体は近代化を以前よりも評価する考えに基づいてより肯定的にとらえられており、そこにおいて宗教教育を行うことが認められたことになるので、今や公立学校は、カトリック教会の聖性があるべき仕方であるという教育の場であるということになるはずである。つまり教会から見れば、現実的に「憑依」が頻発している「公立学校」は、すでに一方で近代的な学校制度がすでに前近代的なものを克服し、他方で宗教教育をカリキュラム内に織り込む戦いに既に勝利している場であるはずであり、「未熟な宗教性」が教会の努力によって一応克服されたことになっているはずの公立学校で、「憑依」のような現象が頻発していることは、教会が築き上げてきたフィリピンの宗教に関する見方や教会が自認している宣教の成果についての考え方や折り合いが悪いということになる。またこの現象自体は、特に現場の聖職者の感触としては、どうも祓わなくて

はいけない悪魔の仕業というわけでもないようにも思え、今一つ「悪魔祓いで解決」という風に整理もできない。そもそも「悪魔祓い」の一連の作業プロセス自体も本当に悪魔が憑りついているのかどうかについて、かなり慎重に考える傾向もあるから、結局「憑依」とは教会にとって、実に位置付けがたいものになっている、と解釈することができそうである。それでも実際には「憑依」の事件が頻発し、司祭に解決が求められるので、人々の持っている宗教観に基づいた期待に応え、皆さんが納得するであろう「いつもの儀礼」で対処する。教会はこの「憑依」とは何かよくわからないまま、慣例に基づいた対応を続けているとみることができる。

学校は問題を解決しきれずに外部に支援を要請する。行政はほぼ「憑依」事件の蚊帳の外である。報道はニュースを把握し取材し報じるため、実相に迫ろうと各方面を取材するものの、さまざまな関係者の様々な主張を取りまとめて報じるにとどまる。そのような中で教会は事件に主におなじみの儀礼をもって対応する。いずれも実は「憑依」の当事者に深く届いて真相を突き止めてはいないが、それでも関係者の中では、結局は教会が一番「現場」に近いところで動いている。人々もまたそのように理解し、教会も教会としての理解の仕方を確認しきれず、位置づけが定まらないまま、そこに引き入れられていく。そこにおいて、教会は報道に対し、また行政に対し、「憑依」の解説者としてふるまう。その構図の中で、公立の学校の中で起こる「憑依」をめぐる報道のされ方は、確かに教会にとって安全な語り方ではあるが、だからといって教会がこの事態を本当に把握しているとも言えない。人々は教会指導者が語る言葉を借りるが、「憑依」をめぐる語りは司祭の説明を踏まえつつも人々の経験と理解によって語り替えられる。言説を押さえているのは一応教会ではありながら、出来事はその権威からはすり抜けている。

6. 今後の研究のために

本研究をより確立したものとするためには、一方で一つ一つの事件に関するより実証的な研究が求められる。また他方で各方面の関係者の理解や解釈、実践に関するデータが必要となる。同時に、今回は個別ばらばらの出来事を「学校の憑依事件」としてまとめたが、その妥当性の範囲に関する検討も必要となる。しかもこうした調査は、人々の強い信心がかかわり、また語ることが例えば呪いなどとかかわるという信心とも絡む可能性が高く、個々の事例の調査自体からして厳密さを求めれば長期の、注意深さを要する、場合によっては多くの障害に直面する調査となることが予想される。特にギングリッチが述べるように、こうした集団ヒステリー的なものの背後に、幼少期の過酷な体罰や虐待、多くの人々にとって身近に経験されやすい災害や紛争の経験、さらに海外在住時の過酷な体験などによるトラウマ的な経験が関連しているとすれば (Gingrich 2006)、問題の射程は極めて深いものとならざるを得ないが、こうした観点からの研究は緒についたばかりだという。この複合的な「宗教現象に関わる研究」はまだ長い道のりを要するのかもしれない。

謝辞

当論文は宗教と社会学会第25回学術大会（2017年6月3-4日、大阪国際大学）における学術発表を元にしており、フロアより多くの貴重なコメント、提案を頂いた。また、2017年10月12日、大阪大学アジア勉強会／大阪大学アジア研究フォーラム（OUFAS）においても本テーマに関する研究会発表を行った。特に大阪大学言語文化研究科の村上忠良教授より貴重なアドバイスを頂いた。ここに記して謝辞としたい。

参照資料

ニュース記事

October 26, 2001

Tonton A. Antogop, “‘Spirits possess students,’ school suspends classes”, in CDN

May 06, 2002

Lorenzo P. Ninal, “Church losing parish flock to cult”, in SC

Jun. 30, 2002

“What lures people into cults?” in PDI

Jan 12, 2003

Fr. Ruben M. Tanseco, S. J., “Spirit-power” in PS

May 1, 2003

Carla Montemayor, “The god-Makers of Pampanga” in *Newsbreak*

September 19, 2003

Ariel Margen “‘Spirits possess’ Lipa school kids in MT

November 4, 2003

Wenna A. Berondo, “Spirit of ‘rape victim’ possesses waitress, 18” in CDN

September 12, 2004

Gilbert Bayoran, “‘Spirits possess’ 5 Bago coeds”, in ABS-CBN News

October 21, 2004

“‘Evil spirits’ possess Victoria schoolgirls?”, in SunStar Zamboanga

March 17, 2005

Fred P. Languido, “EVIL SPIRITS HAUNT CPDRC: Priest says jail cursed”, in F

Aug 20, 2005

“Progressive doesn’t mean necessarily irreligious” in PDI

October 26, 2005

“‘Spirits’ possess students in South Cotabato” in SC

October 31, 2005

Aquiles Zonio, “Evil spirits descend in Banga school” in SunStar General Santos

November 22, 2005

Leslie Ann G. Aquino, “Church endorses film about exorcist” in MB

Jan 23, 2006

Antonio Montalvan II, “Valuing Catholicism” in PDI

March 08, 2006

Candy S. Genovea, “Man possessed by evil during Bible study” in SunStar Bacolod

July 11, 2007

Jane Cadalig, “Students ‘possessed’ by ‘disturbed spirits’” in SC

November 5, 2007

“The Catholic Church and all things spooky” in MT

October 31, 2009

Cathy C. Yamsuan, “Wandering spirits need our prayers” in PDI

November 7, 2009

Cyrain Cabuenas, “Leyte-Samar priests learn about exorcism”, in PDI

November 27, 2010

Elizabeth Angsioco “Exorcism” in MS

April 15, 2011

“Catholic priest in ancient war with ‘demons’” in MT

June 3, 2011

“Church treads slowly on ‘evil possession’ case” in PDI

August 27, 2011

“Evil spirits ‘possess’ 56 students” in SunStar Davao

October 14, 2011

““Evil possession” suspends classes for two weeks” in F

October 29, 2011

“Emulate saints, not ghouls” in PS

October 9, 2012

‘Evil spirit possesses’ 17 students in SC

October 10, 2012

““Evil spirits” strike again in same school” in F

June 28, 2013

Nathaniel R. Melican, “‘Possessed’ school half empty; students stay away” in PDI

September 24, 2013

Ria Mae Y. Booc “20 high school students “possessed” by evil spirits” in F

November 2, 2013

Tina G. Santos, “CBCP exec: Cases of ‘possessed’ teens on the rise” in PDI

October 28, 2014

Bryner L. Diaz, “6 students ‘possessed’” in F

November 22, 2014

Justin K. Vestil, “Some students ‘possessed’” in SC

(主要紙及び頻度の高い新聞は略称を用いた)

*CDN: Cebu Daily News

*F: Freeman

*MB: Manila Bulletin

*MS: Manila Standard

*MT: Manila Times

*PDI: Philippine Daily Inquirer

*PS: Philippine Star

*SC: SunStar Cebu

- カトリック司教協議会の司牧教書（1990年代以降、いずれも2017年6月1日に確認）

Pastoral Letter on Filipino Spirituality

10 July 1999

http://www.cbcponline.net/documents/1990s/1999-filipino_spirituality.html

“MISSIONS” AND THE CHURCH IN THE PHILIPPINES

A Pastoral Letter on the Church’s Mission In the New Millennium 5 July 2000

<http://cbcpwebsite.com/2000s/2000Docs/mission.html>

‘BEHOLD I MAKE ALL THINGS NEW’ (Rev 21: 5) Message of the National Pastoral Consultation

On Church Renewal January 27, 2001,

<http://cbcpwebsite.com/2000s/2001-02/behold.html>

PRIMER ON NEW AGE January 08, 2003

<http://cbcpwebsite.com/2000s/2003/primer.html>

A PASTORAL STATEMENT ON “THE DA VINCI CODE” May 12, 2006

<http://cbcpwebsite.com/2000s/2006/davincicode.html>

PASTORAL STATEMENT ON THE JUBILEE OF ST. PAUL 2008–2009 July 6, 2008

<http://cbcpwebsite.com/2000s/2008/2008jubileestpau.html>

カトリック司教協議会の公文書

Acts and Decrees of the Second Plenary Council of the Philippines. 1992. St. Pauls.

Catholic Bishops’ Conference of the Philippines. 1997. Catechism for Filipino Catholics. Word and Life Publications

参考文献

- Beckford, James A., and Araceli Suzara. 1994. A New Religious and Healing Movement in the Philippines. *Religion* 24, 117–141.
- Bulatao, Jaime, S.J. 1982. Local Cases of Possession and their Cure. *Philippine Studies* vol.30, no.3, 415–425.
- Bräunlein, Peter J. 2009. Negotiating Charisma: The Social Dimension of Philippine Crucifixion Rituals. *Asian Journal of Social Science* 37, 892–917.
- Cannell, Fenella. 1995. The Imitation of Christ in Bicol, Philippines. *The Journal of the Royal Anthropological Institute*, Vol. 1, No.2, 377–394.
- Ferdinand D. Dagmang. 2008. Malasakit (Compassion) and Damay (Empathetic Assistance): An Indigenous World-Embedded Compensation and Resistance at the Margins. *Unitas* 81/2, 307–336.
- Gingrich, Heather J. Davediuk. 2006a. An Examination of Dissociative Symptoms As They Relate To Indigenous Filipino Concepts. *Social Science Diliman*, 3: 1–2, 1–48.
- Gingrich, Heather J. Davediuk. 2006b. Trauma and Dissociation in the Philippines. *Journal of Trauma Practice*, 4: 3–4, 245–269.
- Gingrich, Heather Davediuk. 2009. Assessing Dissociative Symptoms and Dissociative Disorders in College Students in the Philippines. *Journal of Aggression, Maltreatment & Trauma*, 18: 4, 403–418.
- Kinne, Warren. 1990. *The Splintered Staff: Structural Deadlock in the Mindanao Church* Claretian Publications.
- Lynch, Frank. 1975. Folk Catholicism in the Philippines. Reprinted in Aram A. Yengoyan and Perla Q. Makil eds. *Philippine Society and the Individual: Selected Essays of Frank Lynch* (2004). Ateneo de Manila University Press, 207–218.

- Mercado, Leonardo N. 1988. Power and Spiritual Discipline Among Philippine Folk Healers. *Melanesian Journal of Theology* 4-2, 51-63.
- Sebatu, Alfons. 2009. A Psychospiritual Approach on Possession and Exorcism: Casting out Satan through Psycho-Exorcism. Claretian Publications.
- Syquia, Jose Francisco. 2013. Exorcism: Encounters with the Paranormal and the Occult (Revised Edition). St. Pauls.
- 市川誠 1999 フィリピンの公教育と宗教—成立と展開過程 東信堂
- 川田牧人 2003 祈りと祀りの日常知—フィリピン・ビサヤ地方バンタヤン島民族誌 九州大学出版会
- 宮脇聡史 2006 フィリピン・カトリック教会の見る「フィリピン」: その歴史と文化の見方 キリストと世界16 81-105
- 宮脇聡史 2010 フィリピン・カトリック教会の公文書に見られるフィリピン史解釈 東洋文化研究所紀要157 122-154

【資料】新聞で報道された15のケースの紹介

発表者が新聞記事を集め始めた1998年から現在まで、21のケースの報道が確認できた。そのうちの最初の15件を紹介する。

ケース1 (2001年10月26日の記事)

高校の近隣で、カップルズ・フォー・クライスト (Couples for Christ) のキャンプに参加していた学生が、様子を見に来た教育省の役人の前で「奇妙な行動」をとるようになった。そのため、セブ島シボンガ市のシマラ国立ハイスクール (Simala National High School) は翌日の授業を取りやめた。数名は教会に連れて行かれ、残りは政府の心理学者に診てもらったこととなった。そのうちの一人は、自分たちだけに見える霊が、学校の当局者がマホガニーの木を切ったことを謝罪するよう要求していると主張した。生徒たちはふだんと豹変し、鋭い目つきになったり、奇妙な言動があったり、気絶したりした。小教区付の司祭は、安易に悪霊に憑りつかれていると断じてはいけなく、としつつ、関わった学生たちの告解を聴き、キャンパス全体を祝福した。キャンプを主宰したカトリック信徒団体は事態に驚くと共に、心理学的な診断と治療を徹底し、特に家族的な背景を確認すべき、とした。人々の中には、この団体が、まだ堅信礼を受けていない学生を参加させたせいだ、と非難する人もいた。記事は最後に、1997年に同じセブのラブ市 (Lapu-Lapu) のマリゴンドン国立ハイスクール (Marigondon National High School) で起きた同様の出来事に言及している。

ケース2 (2003年9月19日の記事)

リバ市のリサル国立ハイスクール (Rizal National High School) において「超自然的な」憑依の波が襲ったため、教員、生徒とも恐怖に襲われ、翌日は休校となった。先ず一人の少女が突然号泣し始めたため、学校の門番でもあった呪医 (alburaryo) が呼ばれ、霊の追い出しを試みた。周囲の女学生たちはロザリオの祈りを唱え、呪医はお守りを用いて悪霊を責めた。そうしているうちに他の女学生たちも倒れたり平常心を失ったりし始めた。さらに二人目の呪医も呼ばれたが、恍惚状態に陥る者、号泣する者が続出したという。教員によると、この学校では1年おきくらいにこうした事態が起こってきたという。今年はすでに先週から取材の時まで続いており、憑依状態になるのはすべて女子学生だという。この学校は墓地跡に建てられており、日本軍政下で殺害された人々が葬られていると言われている。校長は、憑依を経験した学生の心理的な検査もしたが異常はみられなかったから、このような異常な事態は心理学的なものではあり得ず、超自然的なものに違いないと断言している。

ケース3 (2004年9月12日の記事)

バコロドのバゴ私立大学 (Bago City College) の5名の女子学生が、寮で「紙の霊 (spirit of

paper)」という儀式をしているうちに「悪い霊に憑りつかれた」という。彼らは夜中に突然大声で意味不明の言葉を叫んだという。但し、当人たちは、アカシアの木のところにいた霊の憑依を受けたが、儀式のせいではない、また違法薬物をやっていたのではと疑われたがそういうことはなかったと主張している。通報によってやってきた警官は彼女たちをバゴ市の小教区司祭のもとに連れて行き、司祭は彼らのために祈りを唱えた。うち2名は翌日もう一度「憑りつかれた」。

ケース4 （2004年10月21日の記事）

サンボアングのビクトリア小学校（Victoria Elementary School）の4名の女子小学生が悪霊に「憑りつかれ」、教室にいた教師と児童に、この土地は我々のものだから出て行け、さもないと暴力をふるう、と脅したという。彼女たちはふだんは行儀のよいきちんとした子だが、そのときは異様に強くなり、また荒い言葉遣いをしたという。バランガイ（最小の行政単位）長によると、これらの子どもたちは学校の中で待ち伏せしていた悪霊の襲撃を受け、憑りつかれたのだという。この事件のために、授業は中断されてしまった。悪霊はその子たちの一人を仲間とし、学校全体を支配したいと言ったが、この事件に対処した霊能治療者たち（spiritual healers）は、彼らにひと月滞在ということで同意させたという。憑りつかれた子供の一人は、悪霊がそんな約束を守るかどうかかわからない、と疑念をぶつけたという。記者は、その疑念にはまだ答えがない、と言って記事を閉じている。

ケース5 （2005年3月17日の記事）

イタリア人の神父が新設のセブ地方拘留リハビリセンター（Cebu Provincial Detention and Rehabilitation Center）を訪問し、教皇レオ13世の祈りを含む儀礼によって、当センターに憑りついてた悪い霊を追放したという。このケースは憑依された人から悪霊を追いつくすいわゆる「悪魔祓い」（exorcism）ではないという。旧館から移されたばかりの囚人たちは尋常でない出来事を多く目の当たりにし、お祓いを要望したという。囚人の変死、防犯カメラに映らない不思議な猫の出没などに不安を覚えたためという。神父は新館を訪れてすぐ、悪い霊の気配を察知したという。この場所はマルコス時代の秘密裏の暗殺（salvage）の犠牲者が多く埋められた場所だと言われ、「キリングフィールド」と呼ばれていたという。

ケース6 （2005年10月26日、31日の記事）

南コタバトのノララのノートルダム校（Notre Dame of Norala）で、18名の女子学生の「憑依」事件があり、神父らが悪魔祓いの祈りを唱えたという。奇妙な出来事は3週間にわたって続いていたが、ある日ひとりの女子学生たちが激しく身震いして地面に倒れたため、司祭が呼ばれ、司祭はその学生のために祈り、他の学生たちのためにもミサが執行された。そうした中次々と

学生たちが叫び声をあげて倒れたという。しばらく彼らは非常に強い力を見せたが、ほどなく脱力し、茫然となったという。この際、カトリック以外のキリスト教の信徒たちも祈りに加わって、超教派的な悪霊追い出しの祈りがささげられたという。この事件のために授業はその後二日にわたり中止となった。校長は全校を宗教指導者たちに祝福してもらったのでもう大丈夫、という。

ケース7 (2006年3月8日の記事)

バコロド市で、聖書研究会の途中、ひとりの男性が奇妙な声で何時間も叫び続け、5人の男によってやっと取り押さえられるようなありさまとなったという。その後彼の姉妹たちも同様の経験をしたという。彼らはバプテスト教会で祈りによって癒されたという。

ケース8 (2007年7月11日の記事)

ベンゲット州トゥバのトゥバ国立ハイスクール (Tuba National High School) で、原因不明のまま16名の生徒がヒステリーを起こし、教会に担ぎ込まれたという。ひとりの学生が気絶し、教師はそれを教室の混雑故と考えてクラスを二分して対応を試みたが、次々と学生たちに異常が生じた。教師自身は「霊が憑いた」とは考えておらず、ヒステリーの一種だとみなしていたという。学校は授業を中止、教会に連れて行かれた学生は祈ってもらい、カウンセリングを受けたという。他方長老たちはこうした事態を受け、在地の儀礼 (地域から考えてキリスト教ではないようだ) で、二階建ての建物を建てたことについて、豚、犬、鳥を捧げて諸霊の怒りをなだめようとした。学校としてはこれを「悪霊の憑依」とはせず、既に安全になったから学校には安心してくるように地域の人々に呼びかけているという。また、学校は教員たちに対し、同様の事態に遭遇した場合に、症状が出た学生を他の学生から引き離すことで、症状が広がるのを防ぐよう努めるように指示したという。

ケース9 (2011年8月27日の記事)

ダバオのコンポステラ国立ハイスクール (Compostela National High School) で、国旗掲揚の最中に、56名の学生の悪霊憑依と疑われる出来事があり、授業が中止となった。彼らは突如奇矯で乱暴な態度を取り始め、周囲を大声で罵倒し始めたという。地域の観光局の担当官も当事者の記録に基づいて、悪霊の憑依があったと記者に語ったという。結局村の医者が悪霊を追いつ出したという。学生たちは小教区教会などの教会施設に連れて行かれ、また聖職者を呼んで校舎の悪魔祓いを行った (exorcise) という。また悪霊がやっけないようにと、当地の小教区司祭がキャンパス内でミサを執行したという。

ケース10 (2011年10月14日の記事)

セブ島中央部のサンタルシア国立ハイスクール (Sta. Lucia National High School) で、4名の女子学生が「悪霊によって憑りつかれた」ため、2週間にわたり休校となった。4名は授業中に意識を失い、そのあと1名が突如狂暴になり、声も変わってしまったという。ひとりは治療センター (healing center) に連れて行かれ、意識を取り戻したという。PTAの会長によれば、この学校では後者の周辺にあった古いマンゴーとゲメリナの並木を切り倒してコンクリートの壁を立て、学生たちはこれに恐れを抱いていたという。過去にも似たようなことはあったが対処可能なレベルで、今回のようなものは初めてという。当地のマリアの子どもたち修道会 (Mary's Little Children) の司祭クリーケンベーク (Frederick Kriekenbeek (セブ大司教区公認エクソシスト)) が4名の他の司祭を伴って校内でミサを行い、生徒たちに対し告解を実施し、セミナーと黙想も行った。これに対し、教育省の地域主任は、即座に授業を中止するのではなく、当該学生に感情的な問題がなかったかどうかをまず調査すべきであり、教員に対する子どもの家族との関係性に関するプログラムを強化すべき、と述べたという。

ケース11 (2012年10月9、10日の記事)

セブ島タリサイ市のジャクルバン国立ハイスクール (Jaclupan National High School) で家政の授業中に、暗い人影のようなものについてくるよう語りかけられ、その後に気絶した女子学生がいたという。彼女以外にも同様の人影に遭遇したという学生がいる。一人目の女子学生が叫び、その後他の、主に女子学生たちが次々と類似の症状を見せたという。教師たちは異常を示した学生たちを、近隣の修道会の聖堂に連れて行った。バランガイ職員は、彼女らが異常な力強さを示し、彼女たちを連れていくのは極めて大変だったという。

ある学生たちは教室が立てられた場所の近くの木を学校当局が切り倒したことに原因があると信じている。学校は修道会の担当司祭の指示で、悪霊を祓う (exorcising evil spirits) 専門のカトリックの団体に対処を依頼した。セブ大司教区の公式エクソシストであるクリーケンベーク師が学内でミサを執行した。親たちは、子どもたちの悪魔祓いは成功したが、学校が校内を祝福してもらわない限り子どもたちを学校には行かせない、と言っている。

もう一つの記事は、この同じ学校で、17人が憑依された翌日にも12人が憑依されたという。クリーケンベーク師がまた彼らの除霊に当たっている。彼は、憑依は木の伐採が問題なのではなく、人間の過ちに関わることだという。また10日の記事はセブ師範大学の心理学者による意見を載せており、それによるとこのケースはいわゆる集団ヒステリーであり、共通の罪悪感情が背景にあるのではないか、とする。

ケース12 (2013年6月28日の記事)

マニラ首都圏マンダラヨン市のイサク・ロペス小中学校 (Isaac Lopez Integrated School) で

は、20名の学生が悪霊に憑かれたとされており、その結果学生たちの半数が休校明けにも登校していないという。学校当局は本当に憑依を経験したのは3名のみで、あとは演技だったのではないかと疑っている。事件後校内でミサをしてもらい、全校を祝福してもらったという。市長も数名の精神科医を伴って学校を訪問し、関係者と意見交換したという。

ケース13 (2013年9月24日の記事)

セブ市のキオト小中学校 (Quiot Integrated School) では、20人以上が悪霊によって憑依されたと信じられており、即時に休校となった。午前中に10名ほどが声色を変えて大声で叫び始めることで始まった「憑依」は要理教育教師 (catechist) の祈りによっていったんは収まったが、午後に再び20名以上が同様の症状を見せ、今度は要理教育教師に加えて信徒司牧者 (lay minister) も祈りに加わった。一部はそれで収まったが、収まらなかった学生についてはクリーケンベーク師のもとで悪霊祓いを受けた。学校はもう一度校舎の祝福を受けることを検討している。師は罪を犯した人間はどこでも悪霊の支配を受けうるし、特にそれは多くの人が殺害された場所で起こりやすいという。また子どもたちの方が大人よりも犠牲になりやすいという。悪霊に疲れた人には問いかけるのではなく、特にロザリオの祈りを祈るとよく、また神の摂理を信じるべきであり、悪魔的なものや悪習慣を捨てるべきであるとする。

ケース14 (2014年10月28日の記事)

セブ市の私立学校アラガオ科学学習センター (Argao Center for Science Learning) で6名の学生が悪霊に憑依されたと疑われている。授業中に女子学生が奇妙な行動をとり始め、一人の男子学生がこれに応じて奇妙の動きをし始めたという。黒い人影のような悪魔に男女は褒美を示されてそそのかされたといい、悪魔は本を破られたと言って怒り、学校中の学生に憑りつくと周囲を恫喝し始めたという。結局複数の学生が暴れたが取り押さえられ、ひとりの女子学生は帰宅に際し地元の小教区教会に連れて行かれた。小教区の担当司祭は、セブの悪魔祓いの専門家はクリーケンベーク師とビンハイ (Binghay) 師 (セブ大司教の秘書でもある) だけで、自分は専門家ではないので、この件が悪霊によるものかどうかは何とも言えない、という。

ケース15 (2014年11月22日の記事)

セブ市のトオン小中学校 (Toong Integrated School) で、学生たちに悪霊が憑いたと報じられている。但し当地の教会はそれが、本当に悪霊によるものか決するためにはさらなる調査が必要であるとしている。35名の学生が授業中に突然倒れ、激しく身震いした。体験者は悪霊が名乗ったとしている。憑依体験者の親の一人は、学校が校舎を作るための道を切り開くためにマンゴーの木を2本切り倒したのが原因かもしれない、という。事件が起こった時、学校はバラングアの職員に助けを求め、彼らは小教区司祭を呼びに行き、公式の悪魔祓い儀礼に通じた助

祭が応じて出かけた。学生たちの数名を呼んで彼らのために祈りを唱えたという。そのうち聖なる塩と聖水に凶暴な反応を示した者をクリーンベーク師のところに連れて行き、除霊を行った。これで憑依は終わりと思っていたが、師が学校でミサを執り行おうとする直前にさらに数名が憑依を受けた。経験者自身は、霊たちに捉えられたと証言している。セブ大司教区はさらなる調査が必要と考えているが、集団ヒステリーの可能性があるのでは、と指摘している。

(その後2015年から2017年にかけて6件の憑依にまつわる事件を報じた記事が見つかるがほぼ同様の内容であり、詳細は割愛する。1件は刑務所であり、あとの5件は学校を舞台に学生が憑依を受けている。地域としてはバコロドが1件、ボホールが1件、残り4件がセブである。)